

## 香川県栗島を対象とした鬼瓦に関する調査

日本大学 学生員 ○東 洋輔 日本大学 学生員 伊藤 知真里  
 日本大学 学生員 中谷 宏 日本大学 正会員 伊東 英幸  
 日本大学 正会員 伊東 孝

## 1. 目的

わが国は近世から明治にかけて北前船の就航により、日本海と瀬戸内海沿岸を中心に多くの港湾都市が発達した。それとともに地域特性を活かした独特な産業や文化が育まれてきた。瀬戸内海に存在する小島の一つである香川県三豊市の栗島は、北前船による繁栄後、航海技術を生かして栗島海員学校が明治30年に設立されるなど、海運・船員の島として発展した。また戦前までは瓦産業でも栄えていた。

本研究では、北前船寄港時における栗島の瓦産業への影響を調査することを目的とする。

## 2. 北前船と瓦

## 2-1 栗島の概要

栗島は、スクリーのような形をしている。瀬戸内海国立公園の中にあり、香川県三豊市詫間町の北部の海上約4kmに位置し、周囲16.5km、面積4km<sup>2</sup>である(図-1)。太古には3つの島に分かれていたが、潮流により島の間に砂洲ができ、3つの島が結びついたといわれる。

栗島は、対岸の福山市鞆の浦と同様、瀬戸内の真ん中に位置し、潮の干満差が非常に大きいため、北前船の全盛期には潮待ちの港として利用されていた。



図-1 栗島付近図

## 2-2 栗島と北前船との関係

栗島の瓦産業がいつはじまり、いつ終わったのかについての正確な年代は特定できないが、文献等で確認できるのは、明治41年以降である。しかし町中を歩くと、民家の鬼瓦には波頭や帆立という北前船を連想させるようなモチーフが使用され、また栗島の

瓦は耐寒性に優れ、遠く東北地方にまで運ばれていたという記録もある<sup>1)</sup>。

ここでは、地元住民へのヒアリング調査と鬼瓦モチーフ模様の分布状況を通して、栗島瓦と北前船との関連性を調べた。

## 3. ヒアリング調査

## 3-1 ヒアリング・テーマと対象者

以下に示す、地元の方3人に、瓦産業の実態や栗島の北前船の歴史などについてお聞きした。

栗島海洋記念館館長：西山恵司氏

栗島で一番古い窯の管理者：西浜の小西望氏

地元住民：桧垣賢造氏

調査日：平成19年8月6日と9日の両日

## 3-2 ヒアリング内容

北前船が寄港していた年代や瓦の生産年代については、次の二説がみられた。

①栗島の鬼瓦が北前船に積み込まれて移出され、栗島が繁栄していたという説。

②明治以降に瓦産業が盛んになったという説。

瓦には刻印が入っている(写真-1左)ので、どの窯で焼いたのか判別は可能だが、現地との対応は不可能であった。鬼瓦の模様にはカタログのようなものがあり、注文主は好きな模様を選べた。また自分でデザインすることもできた。小西氏によると鬼瓦生産の全盛期は昭和初期で、窯は20ヶ所ほど存在していたが、瓦生産の衰退に伴って取り壊され、現存する窯は西浜で小西氏が管理する東風源治窯(写真-1右)と、中新田の大西勝三郎氏が管理する大西勝三



写真-1 馬の刻印(左)と復元窯(右)

キーワード 栗島 鬼瓦 瓦産業

連絡先〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 日本大学理工学部社会交通工学科都市環境計画研究室 TEL047-469-5572

郎窯の二ヶ所のみである。瓦生産の詳細な衰退時期については不明であった。

### 3-3 考察

「栗島瓦は耐寒性に優れ、遠く東北地方にまで運ばれていた」という記録や上記の話から、栗島瓦は、北前船を利用して運ばれたという仮説が考えられる。この場合、問題はどのようにして流通したのかである。というのは、栗島には海産物や民芸品など特別な移出品がなかったため、問屋業が発達しなかった。そこで考えたのが、図-2の福山(広島)や笹岡(岡山)の問屋を利用した流通経路である。栗島に瓦問屋があれば、栗島は今の栗島ではなかったはずである。

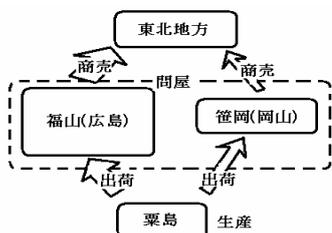


図-2 栗島瓦の推定流通モデル図

## 4. 鬼瓦調査

### 4-1 鬼瓦の特徴

波頭や帆立の鬼瓦は、別々(写真-2左)ではなく、波頭模様の鬼瓦の上に帆立模様の棟飾り瓦が設置されるという対の形(写真-2右)が多い。このモチーフ自体は、北前船時代からの金刀比羅信仰に由来している。栗島の民家の鬼瓦には、鬼面の代わりに打出の小槌や松竹梅の模様を用いることも多く、また家紋を入れているところもある。



写真-2 鬼瓦(左)と、鬼瓦と屋根飾り瓦(右)

### 4-2 調査対象地域と対象民家

島内で最も繁栄している「潟」という地域を調査地域とした(図-3)。調査対象地域内の家を一軒ず



図-3 調査対象地域と対象民家の分布図

つ道路から見て回り、各家の鬼瓦の模様や設置場所、敷地内の位置を確認した。プロットは、調査した家の位置を示している。

### 4-3 調査結果

鬼瓦の模様は家ごとに非常に多くのデザインがあり、モチーフも多種多様であった(図-4)。この内、鬼瓦の由来である鬼面を設置している家はわずかに軒であった。旧家では鶴亀などの古典的模様が半数近くを占め(68箇所)、土塀の鬼瓦は鶴亀など対になったものが多い。新しい家では、マンガースなどの現代的な模様を取り入れている所もあり(2箇所)、ないしは鬼瓦を使用していなかった。北前船を連想させる波頭と帆のセットは3棟と少なく、波・ハートのセットを入れても6棟しかなかった。

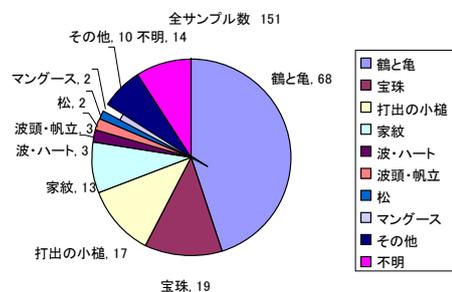


図-4 鬼瓦装飾の分類図(箇所)

### 5. 栗島の鬼瓦に関する一考察

栗島には現在、窯がほとんどないことや、瓦焼き職人が一人もおらず、瓦の生産が全く行われていない。窯は、窯跡がひとつと復元された窯がひとつあるのみである。島内では、新築家屋の鬼瓦の設置率が減少しているのに加え、伝統的な鶴亀の鬼瓦を設置する家が少いため、栗島の歴史的、文化的な町並みが失われようとしている。今後、これらの保全方法などについて検討していく必要がある。

### 6. おわりに

本研究は、地元住民へのヒアリング調査を行い、北前船寄港時における栗島の瓦産業との関係を推測するとともに、栗島の特徴的な鬼瓦模様の分布状況について調査した。今後は、栗島の町並み保存などについても検討していきたい。

【謝辞】 本論文の執筆にあたり、栗島海洋記念館館長西山恵司氏をはじめとする多くの方々にご協力頂きました。ここに感謝の意を表します。

※本研究は「港町ネットワーク・瀬戸内研究(粕山泰訓)」の一貫として調査を行ったものである。

1) 「香川県の近代遺産」-香川県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書一、香川県教育委員会、2005年3月31日